現代ＧＰ報告書

❶テーマ　　「地域在住の外国人の生活支援」　～地域冊子を媒体として～

❷グループ名　　「地域社会ゼミ」（メンバー14人＋清水洋行先生）

❸内容・スケジュール

グローバル化と言われる今日、日本にも多くの外国人の方々が生活するようになってきている。そして、学芸大学近辺も決してその例外ではない。留学生、労働者、単身赴任など様々なタイプの外国人が居住しているが、その中には日常生活での情報に接する機会が少なく不便を感じている方々も多くいるのが現実である。「少しでも日本での地域の生活を楽しく暮らしてもらいたい」「私たちに何かできないか」。この気持ちから私たちは「地域情報」「生活情報」を載せた冊子の発行、というかたちでの活動を試みることにした。

＜主な活動＞

・毎週木曜のゼミ集会での活動報告、活動計画

・役割分担しての情報収集

（インターネット、文献、配布資料、インタビュー等）

8月　国分寺、小平、小金井の各国際交流協会にインタビュー

新宿大久保フィールドワーク　→とても外国人居住者の多い街

10月　国分寺国際交流フェスタ・ボランティア参加

11月　学芸大留学生 Party 参加

小金井ゲストハウス

学芸大留学生委員会

学芸大留学生センター

学芸大国際課

サロンぬくい

インタビュー

資料収集

12～１月　店舗訪問（飲食店、衣料店、娯楽施設等）

全体文章構成

レイアウト決定

2月　印刷作業、配布作業（予定）

❹地域の現状調査報告（国分寺・小金井・小平）

外国人支援冊子を作成する上で、まず必要な大前提は「地域の現状把握」である。地域の外国人の現状を把握し、彼らがどんなことに困り、どのような情報を欲しがっているのかというニーズを知り、また既に行われている彼らへの支援について知ることが必要であった。

＜小金井市役所へのインタビュー報告＞

小金井市役所で外国人登録を受け付けている市民課でお話を伺った。以下は質問項目とそれに対する回答。

●小金井市の外国人の特徴

留学生（東京学芸大学、東京農工大学、上智大学）が多い

※外国人登録者数（2006 年 10 月現在）

1501 世帯　2307 人（男 1180 人、女 1127 人）

●市役所での対応

・民間の国際交流団体の紹介（※市が運営する国際交流協会はない）

・外国人登録など事務手続き

・英語による相談（月 1 回）

・冊子の作成、配付

●民間の国際交流団体

・小金井国際交流の会

・小金井市生活日本語教室

・ウェルカムサロン・ヌクイ

●外国人がよく使う施設

ゲストハウス（梶野町に何軒かある）

＜ゲストハウスへのインタビュー報告＞

小金井市にはゲストハウスがたくさんあるということを市役所で聞き、実際にゲストハウスの 1 つであるビッグアップルへ訪問した。しかし、入居目的以外のインタビューや調査などは一切受け付けていないということで、話を聞くことは出来なかった。

＜ゲストハウスとは＞

外国人、もしくは国際交流を目的とする日本人が入居する賃貸住宅。敷金や礼金、保証人が不要というところもある。パーティーが行われるなど、居住だけでなく国際交流が出来るという特徴がある。

小金井市では、市による外国人支援は手続きなど事務的なものに限られている。国際交流や生活上の不安解消をするためには、民間の国際交流団体を利用する必要がある。市でも月 1 回英語による相談を受け付けているが、実施頻度の低さからして気軽に利用できる性質のものではない。小金井市に在住する外国人には留学生が多いというと特徴があるため、市よりも大学に頼ることが多いのではないだろうか。

もう 1 つの特徴としてはゲストハウスが多いということが分かったが、ゲストハウスでは入居者同士の国際交流を活発に行う反面、調査目的のインタビューは一切受け付けていない。外国人に直接聞くことはもちろん、管理者の日本人にも話を聞くことができないという閉鎖的な一面ももっている。よって、小金井市に在住する外国人が欲しい情報を調査するには、民間の国際交流団体、もしくは小金井市内の大学へのインタビューが必要だと思われる。

＜国分寺国際交流協会のインタビュー報告＞

・ 国分寺に住む外国人は約 1500 人おり、そのうち 500 人が中国人、500 人が韓国人、残りの 500 人がその他の国から来日した人である。

・ 国分寺に住む外国人は留学生とその配偶者が多く、年齢層としては若めである。

・　第二外国語として英語が通じる人も多い。
・　外国人が困っていることの把握ができている印象。
例＞外国語が通じる医者、自転車屋、国際ファックス、スポーツ施設はどこにあるか等
・　公立学校の外国人児童・生徒への対応が比較的充実している印象
例＞1 日 1 コマだけ個人授業が行われる、日本語指導員が規定の時間数つけられる等

＜小平国際交流協会のインタビュー報告＞

・　小平市に住む外国人は 4000 人
・　一橋国際寮、ブリジストンへの派遣従業員、芸術家の人々が多いそう。
・　近年は日本語が全くしゃべれない中国人が増加している傾向にある。
・　外国人が困っていることの把握はあまりできていない印象
→交流を求めて国際交流協会に来る人が多い
→日常でのトラブルは内部で解消されているという協会の考え
・　民間と行政との連携がないので個人的な交流に留まっているのが現状

協会の仕事は主に日本語教室の開催。大学や仕事が終わってから外国人が勉強できるようにと遅めの時間に開催されることもある。日本語教室では外国人同士の交流もなされており、ネットワークを作る意味でも重要な場所となっているようだった。また、職員やボランティアの方は相談に応じるほかに、日本の生活がわからない外国人のためにプライベートでもお世話をすることがあるということだった。

＜国際課のインタビュー報告＞

国際課では交換留学の選考、派遣、留学生の受け入れなど、事務的なものが中心だった。留学生からの質問で多いものは銀行口座の作り方、国際電話、ファックス、インターネットカフェなど。外部から大量に送られてくる資料が置いてあり、情報提供の場としても利用されている。ただ、人数が少ないこともあり、充分に手が回らない業務もあるということだった。

国際交流協会の活動というと、どこも同じようなことをしているのだと思っていたので、国分寺と小平とを比べただけでもこのような差異があることに驚きました。国際交流に「これ！」という断定された視点は存在せず、常に様々な角度から考える必要があると感じました。

東京学芸大学に３年間通っていたにも関わらず、国分寺駅と大学の往復ばかりで大学の周辺についてほとんど知らなかった私はこの活動を通じて大学周辺の地域について、今までよりも知ることができました。そして、大学周辺の地域について今までよりも興味を持ちました。

調査を行っていて、すでに私達の知らないところで外国人のために活動している団体がたくさんあることを改めて認識した。私達の活動にも理解をしていただいてインタビューなど協力してもらった。自分達の活動が成功することも重要だが、そういった団体のことをもっと色んな人に知ってもらうようにしていくことも重要な役割だと感じた。ボランティアの募集など、お手伝いできるところでこれからも協力していけたらいいと思う。

地域社会ゼミに参加するようになり、先生や先輩のアドバイスを聞きながら、フィールドワークや様々な経験をしたことで興味の幅が広がり、自分が今後学んでいきたいことの方向性もある程度定めることができました。今後の地域社会ゼミも、引き続きフィールドワークをひとつの大きな柱とし、知識や興味、人とのつながりを広げていけるような活動をしていきたいと考えています。

このプロジェクトを通して初めて在日の外国人の暮らしについて考える機会を得た。「自分にとって」ではなく「外国人にとって」のこの町の現状を考えてみると、また新たな問題が見えてくると思う。今回の活動はそうした問題を見つめなおす機会にもなる。また、マップ作りの過程において、必然的に外国人の文化を知る必要も出てくる。今回のプロジェクトは、そうした意味で私にとって大変意義深いものになると考えている。

❺まとめ

課題としては、まだ冊子の発行によってのフィードバックがなく、地域の外国人への貢献度が分からない点である。しかし、冊子を作る過程においてこのような地域情報媒体のニーズは大きいという現状が感じられ、活動の継続によってこそ成果が現れると考えている。外国人だけでなく地域に住む日本人の方が冊子を手に取ることで、地域の外国人の存在を「意識」し始め、これをきっかけに「交流」が生まれるような媒体、いわば地域国際交流のひとつの「かけはし」にしていきたい。

また今回冊子作りで集めた情報やノウハウ、新しく生まれた人とのつながりを活かし、地域情報媒体の役割としてのホームページ・リンク集作りを手がけるなど、私たちのゼミで私たちなりに地域づくりを継続していきたいと思う。

今回現代ＧＰのプロジェクトの一環としてのアドバイスや資金面のサポートは、私たちが活動をする上でとても大きなきっかけ作りとなり、メンバー一同大変感謝しています

（３年杉浦麻理子、２年千葉清香、３年中嶋孝夫、２年中武里美、３年成松智樹、
３年西村知倫、２年藤原久道、３年宮原靖卓　　以上の者の活動報告書の再構成により作成）